

でもありませんが)、ありとあらゆる事柄を扱うことができることが歴史学に携わる醍醐味であると言っても言い過ぎにはならないでしょう。

また、東洋史・西洋史などではある特定の地域と関わりを持つこととなります。私の場合にはカザフスタンということになりますが、現代のカザフスタンの人と関係を持ち、彼らの歴史と向き合うことによって、それは一つの地域研究にも成り得ます。さらには、諸外国に出かけてその土地を見ることも魅力となるかも知れません。

このようにして確認できる、歴史学にかかわることの持つさまざまな可能性を最後に強調して、拙い講演の要旨を締めくくりたいと思います。

人間学としての歴史研究

—古代ローマ史研究の視点から—

梶田 知志

私が歴史学の道を歩み始めたのは、学部二年次に西洋史学専修に進級した時点で遡りますが、専修選択には随分と迷いました。当時、私は文芸専修に進級するつもりで、課題制作の準備に取り掛かっていました。しかし、その取材過程で自分自身の知識の乏しさを痛感し、自分にはまだ書きたいこと、文章で伝えたいことが何もないことに気がついてしまいました。結局、私の憧れはただ文章を連ねることそれ自体に向けられた非常に漠然としたもので、「何を書くか?」という根本的な問題について深く考えていかなかったのです。そこで選択肢として急浮上したのが、西洋史学専修でした。その最も大きな理由は、歴史学が「文字発明」以来の人類の全営為を研究対象とし、学ぶことが可能な学問だと思われ、そこで

研鑽を積めば先ほどの「何を書くか?」という問題を解決できるのではないかと感じたことでした。

このような次第で私は西洋史学専修に進級しましたが、今度は研究テーマ設定という新たな問題に直面しました。すでに西洋古典語の学習をしていた経緯から、漠然と古代史か中世史と考えていましたが、研究対象との「絶妙」な距離感が私の理想に近いという理由で古代ローマ史を選ぶことになりました。

その後、卒業論文の準備を機に剣闘士闘技の研究に携わることになりました。剣闘士闘技とは、前二六四年の最初の興行から後四〇四年の「公式」の廃止まで営まれていた古代ローマの見世物の一つで、武装をした戦闘要員が特別な会場で死闘を繰り広げるというものです。現代の感覚からすれば、非常に過酷かつ残酷な見世物ですが、私がこの見世物に関心を持ったきっかけは、六〇〇年以上もの長い期間にわたって営まれていた慣行が、一人の皇帝の命により全

て廃止されたとされる歴史記述に対する疑問でした。その結果が卒業論文となったわけですが、「剣闘士闘技」という歴史的事象への関心は、やがて大学院進学を機に見世物で闘いを繰り広げる「剣闘士」それ自体へと移っていきました。とりわけ、彼らの差別的境遇とアレーナにおける栄誉の根底にあるもの、そして人的紐帯とその心性が目下の関心事となっています。

私にとって、歴史学は、とかくロマンを掻き立てられるものというわけでもなく、言うまでもなく自身のルーツ探しというわけでもありません。また、そこに現代社会に生かすべき教訓・典拠があるとも考えられません。むしろ、私が古代ローマ史に携わる過程で得られた結論は、それが「人間とは何なのか？」を問う学問ではないかという事です。過去の人々の行為、有形無形の生成物、相互の繋がりを史料を通じて考察すること、それにより史料から、別の時間・空間を生きた人間のあり方が垣間見えるように思われるのです。

しかし、これのみでは、研究が当時のコンテキストにおける歴史上のあらゆる事象の意味を明らかにすることにはなりません。歴史とそれを研究する行為が私たち現代人にとってどれほどの意味があるかについてはよくわからないままです。ここで重要になってくるのが、「現在性」を担保することだと思われれます。もっとも、これが過去からの継承や現代世界の事象との安易な重ね合わせにより意図的に行われると、その研究の信憑性や意義そのものを大きく毀損することは明らかです。しかし、一方でこれが全くなされないと、その行為自体の存在価値は誰からも認められないことになるでしょう。なぜなら、「現在性」が、歴史学に限らずあらゆる行為に常に新しい価値・意義を与える大きなファクターだからです。

私たちが歴史上の人物・事象・事物に接した際に、仮にそれらと直接的な関係性がなっていないとしても、私たちの心にある種の感情や共感が去来することがあります。これは、私たちが同じ「人間」という枠組を共有し

ているために起こるものだと思われれます。他方、私たちは必然的に「現在」という時代的制約を受けており、歴史上のあらゆる存在とは時間・空間を隔絶されていますが、このように「人間」という枠組を意識することにより、私たちは現代という「檻」から時空間の向こう側にある歴史的存在と繋がりをもち、そこに意味や価値を付与できる視点にようやく立つことができます。この「繋がり」を保つことこそが、まさに歴史、延いてはそれを研究する行為の「現在性」を担保すると思われれるのです。

このようなわけで、歴史学には、過去の「人々」の行為、有形無形の生成物、相互の繋がりを史料の渉猟から考察することに、より、対象の時代あるいはそれと直接的に関連をもつ時代のコンテキストにおける歴史事象の意味、また同時に「現在性」の担保を通じて考察者の生きる時代のコンテキストにおける意味を明らかにするという二つの役割があると思われれます。そして、私は、その根底には「人間とは何なのか？」

という、私たちが人間である限り抱き続ける問いに私たち自身の答えを見出すためのヒントが隠されていると考えています。

シルクロードに魅せられて

—海外調査の現場より—

田中 裕子

シルクロードと聞くと、何をイメージするだろうか？列を成して旅するラクダの隊商、或いはそれを幻想的に描いた平山郁夫の絵画だろうか。正倉院の御物、敦煌の石窟群、バーミヤンの巨大な仏像なども有名であろう。沙漠、寺院、廢墟の遺跡、いろいろ挙げられる。そうした中で、私は特にユーラシア大陸北部を通じた草原世界に興味を持っている。

二〇〇四年八月。モンゴル国の西北部にあるオランオースグI遺跡の発掘調査隊に参加した。日本とモンゴル国との共同調査隊で、一九九九年以降当遺跡での調査を

続けている。首都のウランバートルから約六〇〇キロ、遺跡のある丘陵眼下には、なだらかに起伏する緑色の大草原が一面に広がり、巨大な石の墳丘が点々と連なる。小石堆がその周りを囲み、シカ紋様の立石が列をなす。抜けるような青空の下調査を進めていると、彼方には地響きを立てながら通り過ぎていく馬群があり、近くではゆっくりと草を食むヒツジの群れがいる。本や写真でしか知らない広大な世界があった。

この遺跡は、ヘレクスルと呼ばれる大型の積石塚と、シカの絵が刻まれた鹿石という記念碑が同時に存在する、紀元前一千年紀前半の遺跡である。

オランオースグI遺跡に並ぶ鹿石は、同様の石造物が中国の西北地域やロシアの南シベリアなどでも見つかっている。同じ時代の青銅短剣や刀子、さまざまな装飾品においても、形態や装飾の類似が数カ国をまたいでみられる。こうした資料は、現在の国境線を越え、今から二〇〇〇年近く昔、草原を舞台に人や情報が行き来した様子を

ありありと伝えてくれる。草原世界の広さとダイナミックな人々の活動を現代に伝える生の資料なのだ。

草原地帯から出土する青銅器や鉄器の装飾に興味を持ち、現地を訪れ調査に加わり、遺跡をめぐる環境に魅せられるようになった。調べれば調べるほど、遺物や遺跡の背景に見えてくる人々の交流の広さと速さに感心してしまう。私自身がシルクロードの考古学に関わりを持ったのは、比較的遅く考古学専修に進んで二年目であった。しかしそれ以来、飽きることなく、さめることなく興味を抱き続けている。草原世界の広がりや独自の文化は、常に世界中の関心を集めるものなのだろう。実際昨年、トルファンで開かれたシンポジウムには二十一カ国からの出席者があった。

シルクロード研究は、中央ユーラシア考古学の一部であるといえ、ボーダレスな文化交流が主要な研究テーマである。そのため、習得するべき言語も多く、対象とする国も多い。各国家間での調査や研究の密度